

からすとうさぎ

小川未明

青空文庫

お正月しょうがつでも、山やまの中なかは、毎日まいにち寒い風かぜが吹ふいて、木きの枝えだを鳴ならし、雪ゆきがちらちらと降ふって、それはそれはさびしかったので
す。

「ほんとうに、お正月しょうがつがきてもつまらないなあ。」と、からすは、ため息いきをつきました。

「町まちの方ほうはにぎやかなのだろう。ひとつ出でかけてみようかなあ。」と、しばらく木きの枝えだに止とまって、考かんがえていましたが、そのうちに、そここころ心にきめて、遠とおい町まちの方ほうをさして飛とんでゆきました。

どこを見みても、雪ゆきの野原のほらで真まっ白しろでした。だんだん町まちが近ちかづくにつれて、道みちの上うえに人ひと通とおりが多おほくなりました。雪ゆき道みちの上うえを歩ある

いていくものもあれば、そりに乗^のつていくものもあります。

また、お正^{しょうが}月^{がつ}のご馳走^{ちそう}を造^{つく}るために、魚^{さかな}を運^{はこ}ぶそりもあれば、みんなの喜^{よろこ}ぶみかんや、あるいは炭^{すみ}や、薪^{たきぎ}のようなものや、塩^{しお}ざけなどを積^つんでいくそりも見^み受けられたのでありました。

欲^{よく}深^{ふか}なからすは、なにを見^みてもほしいものばかりなので、もしや、このあたりになにか落^おちていはしないかと、あたりを見^みまわしながら、あつちの木^き、こつちの木^きとうろうろ飛^とびまわっていました。

すると、町^{まち}からすこし離^{はな}れたところに森^{もり}があつて、そこに一軒^{けん}のりっぱな家^{いえ}があり、煙^{えんとつ}突^つから煙^{けむり}があが上^あっていました。からすは、その森^{もり}にきて止^とまると、家^{いえ}の中^{なか}からは、おいしそうな香^{にお}いが流^{なが}れ

ていましたので、からすは、とうとういちばん低い小舎の屋根まで降りてきました。

それは、この家の犬小屋でありました。中には、一匹きの犬が、わらの上にはらばいになっていましたが、その白と黒のぶち犬を、どこかで見覚えがありましたので、からすは、じろじろと犬の方をながめていました。犬は、みよなからすと思つたのでしよう。ふいに、「ワン。」といつて、からすをおびやかしました。からすは、この瞬間に、犬のことを思い出したのです。

「やあ、犬さん、あなたのお家はここですか？」と、声をかけました。犬は、不思議そうにからすを見ていましたが、

「からすくん、いつ君にお目にかかったことがあつたかね。思い

出せないが？」と、犬は、たずねたのです。からすは、ずるそう
な目つきをして、犬を見ていましたが、

「あなたは、先だつて、山でうさぎを追いかけて、とうとう逃が
してしまいなされたのを、私は、木に止まって見ていました。あ
なたは、たいそう残念そうでありましたね。」と、からすは、
いいました。

「ああ、あするとき、君は、どこかで見えていたのですか。僕は、主
人に対して、ほんとうに面目なかつたのだ。」と、犬は、急
に、恥ずかしそうにして答えました。

「なに、あとうさぎなら、また捕らえることができなともかぎ
りませんよ、私が、うまくいって、この野原へつれ出してくるこ

ともできるのです。」と、からすはいいました。

犬は、このあいだ、主人のお伴をして、獵に出かけて、主人が打ち損なつたうさぎを追いつめて、もうすこしで捕らえるところを逃がしてしまったので、残念に思つていた際ですから、からすのいったことをきいてどんなに喜んだでしょう。

「君の智慧で、この野原まで、あのうさぎを誘い出してくれたら、僕のできることなら、どんなお礼でもするよ。まあここへ下りてきたまえ。お正月のご馳走があるから、食べてくれたまえ」と、犬はいいました。

からすは、そういわれるのを待つていました。さつきから、犬のそばにあつた、コンビーフのかかったご飯や、餅の残りなどが

ほしかつたのです。からすはきつそく下りてきて、たくさん食べました。そして、明日の晩方、裏の広い雪の野原へ、うさぎを連れてくることを約束して帰りました。犬は、今度こそ、うさぎを見つけたら、逃がすまいと考えました。そして、わらの上にながら、

「うさぎは、山に餌がなくなつたから、からすの口車に乗つて、原へ大根の残りや、桑の枝を食べにくる気になるかもしれない。だが、りこうなうさぎだ、あのからすめ、うまく誘い出せるかなあ。」と、犬は、考えていました。

からすは、山へ帰ると、すぐに、うさぎのいる場所へやってきました。そこは、林の中の大きな木の根で、そこだけは雪が薄か

ったのでした。うさぎは、根ねの洞ほら穴あなの中なかで、子供こどもとむつまじく暮くらしていました。

「うさぎさん、こんにちは。」と、からすが、穴あなからのぞいて、声こえをかけました。

「なんですか、からすさん。」と、うさぎは顔かおを出だしていいました。

「お正しょう月がつで、町まちの方ほうがにぎやかですから、見物けんぶつにお出でかけなさるよう、おすすめにきたのです。」

「まあ、ごしんせつにありがとうございます。どんなににぎやかですか?」

「ちよつと、あちらの野原のほらまで出でてごらんなさい。みかんをたく

さん積つんだそりが通とおるし、大根だいこんや、ごぼうや、お魚さかななどを載のせたそりが通とおりますよ。まあ、そのご馳走ちそうを見みるだけでも目の楽たのしみになります。明日あすの晩方ばんがた、暗くらくならないうちに、私わたしが、いいところへご案内あんないしますよ。」と、からすは、いいました。

「町まちに住すむ人ひとたちは、ぜいたくですね。」

「ええ、ぜいたくですとも。そうそう、いつかあなたを追おいかけた犬いぬまでが、コンビーフのかかったご飯はんを食たべていましたよ。」
と、おしやべりのからすは、いいました。りこうなうさぎは黙だまつてきいていましたが、からすが帰かえると、穴あなの中なかに入はいって、子こうさぎに向むかい、

「もう私わたしたちは、ここに安あん心しんしていることができないのだよ。」

さあ今夜こんやのうちに引ひつ越こしをしましょう。「と行って、からの
気きのつかない、山やまの奥おくへ入はいつてしまいました。明あくる日ひ、からの
がきたときには、木きの根ねの洞ほら穴あなの中なかは、まったく空からっぽになっ
ていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

からすとうさぎ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>